

## 1 育成マインドの定義

プレイヤー個々の成長過程を重視する考え方

- ① 課題の与え方、課題を考えさせるコーチング
- ② 将来を見据えた勝敗を目指すプロセス、勝敗結果の捉え方
- ③ オーナーシップ（自分自身で責任を持つ・主体性）を育む

## 2 育成マインドの必要性

① バスケットボールは互いの戦術を阻止し合うスポーツ → プレーヤーのオーナーシップを育む

世界トップレベルのバスケットボールは、常に互いに行いたいことを阻止し合う攻防の連続です。「戦術が阻止された後でも個で打開できる能力」「自身の判断で戦術を超えられる能力」がトップのプレーヤーには求められます。コーチの指示を従順に遂行するだけのプレーヤーは、最高のプレーヤーとは捉えられていません。

② バスケットボールから人生を学ぶ → 将来を見据えて

バスケットボールを通じて、プレーヤーは人生で役立つものを学べるように、コーチはサポートする必要があります。プレーヤーが主体性を持ち、仲間と共に課題の解決に向かって取り組み、自己実現を目指します。バスケットボールを通じて学べることを、コーチはプレーヤーに気づくように働きかけましょう。

③ 育成マインドの普及で「日本を元気にする」

これまでのコーチング概念を未来に向けてさらに発展させ、育成年代のコーチ全体がマインド（フィロソフィ・コーチング概念）を変化させていく必要があります。育成マインドは、バスケットボールによる人材育成をよりよいものとし、将来的に「バスケットボールで日本を元気にする」というJBAの理念の実現につながると考えています。

## 3 具体的なコーチ行動

① 課題を与えて考えさせるコーチング

<これまでのコーチングスタイル>

「できない子どもをできるようにしてあげる」=コーチが課題を与え、コーチが解決します。

⇒ 子どもは、解決するための根拠、プロセスがわからないまま課題の解決方法を学びます。

そのため、子どもたちは問題と答えを待ち、課題を解決してもらうことに慣れていきます。

⇒ 「課題を与えられ、解決してもらおうコーチングで育ったプレーヤー」はコーチに依存しやすい傾向があります。

### < これからのコーチングスタイル >

「できない子どもが気づくようにヒントを与える」=子どもが課題に気づき、子ども自身が解決することに対して、大人は助言、支援的指導をします。

ティーチングポイントが大切であり、大人が示すか、子ども自身が気づくように助言をしてあげることがよいでしょう。

「課題を見つけること」と「課題の解決を図ること」を分けて捉え、「課題を見つけること=ティーチングポイントの認識」であり、全て大人が準備するのではなく子どもが発見したように感じられるように仕向ける（気づくように導く）こともコーチングテクニックです。

「課題の解決を図ること=できるようになる」が年代や習熟度に応じて子ども主体でできるように大人は助言や支援をするコーチングを推奨します。

⇒ コーチが課題を考えるヒントを投げかけることで、子どもたちは思考を繰り返し、自ら課題を考え、解決する力が養われます。

⇒ 「課題を与えて考えさせるコーチングで育ったプレーヤー」が将来的に質の高いプレーヤーになります。

## ② 将来を見据えた勝敗を目指すプロセス、勝敗結果の捉え方

### < 背景 >

子どもが勝負に没頭することは自然なことです。遊びには勝ち負けがあり、そこに夢中になることが楽しさの要素です。逆に、大人の勝負のこだわりが、子どもたちの主体性を奪うことにつながります。コーチの勝敗への関わり方は、プレーヤーの主体性の成長段階に応じる必要があります。



子ども自身が勝利を目指し、勝利を目指すプロセスを通じて競争の価値を学び、体感することが重要であり、コーチは勝利を目指す過程や結果の捉え方を伝えるため助言・支援的指導をします。

#### ▶ 勝利至上

「大人が勝たせてあげる」といったコーチングは、世界の育成現場ではなくなっています。

#### ▶ 育成至上

勝敗を度外視したり、コーチの責任を放棄することは、コーチングに値しません。グッドルーザー（よき敗者）の振る舞いを身につけましょう。

**プレーヤーの将来を見据えて指導する — 子どもを大きく育てるための勝敗の捉え方 —**

「勝利」と「成長」の天秤は、常に両方を求める方法を模索します。「勝利」と「成長」の天秤がトレードオフ(どちらかを選択したら、他方を選択することができない)になった時には、育成年代のコーチは「勝利」以上に「成長」を追求する責任に比重を置くことを求めるべきです。勝利に最も効果的な手段が、プレーヤーの将来にとって最適なものとは限りません。常にプレーヤーの将来を見据えて、その時に学ばなければいけないものがあります。また、「学び」には段階や順序があり、プレーヤーの将来を犠牲にして、目先の勝利に必要なプレーを強要することは避けなければなりません。

**プレーヤーの将来を見据えて指導する — ゲームは、子どもを大きく成長させる機会 —**

プレーヤーの将来のための「土台作り」をするのが育成年代のコーチの責任です。ゲームは土台作りの手段の一つであり、ゲームの勝敗だけがすべてではないことを知ってください。プレーする機会を与えることが、プレーヤーの成長にとって最も重要な機会となります。そのためにも、トライ(挑戦)&エラー(失敗)を認めます。勝つことだけを優先するとエラー(失敗)を恐れ、トライ(挑戦)が減少してしまいます。

競争することが大切です。勝とうと「全力」で取り組むことで、プレーヤーはその過程において工夫し考察することを学びます。「全力」で取り組んだ結果、ゲームに負けたとしてもそれは失敗ではありません。負けた時はグッドルーザーの意味を知る機会であり、コーチや保護者など大人のサポートが重要となります。相手を讃えることや、自ら成長する機会と捉えましょう。

**③ オーナーシップを持つ自立したプレーヤーの育成**

コーチは、「どのようにプレーするか」「どのようにして勝つか」といった課題をプレーヤーから奪ってはいけません。勝敗についての課題を設定することにプレーヤー自身も関わることで、勝負に対するオーナーシップ(結果は自分次第で変わるという考え方)を育むことができます。勝敗についての課題を設定することに自ら関わることで、コーチに依存することなく「自立したプレーヤーの確立」を目指すことが期待されます。

## 4 コーチの指導行動の在り方例

バスケットボールを始めた子どもたちには、指導を多くしてルールやスキルを伝えます。誤りは正して、正しいスキルの習得を目指しましょう。指導行動は大きいですが、常に「バスケットボールの楽しさ」を強調します。その過程において、子どもたちは自身で判断する楽しさ、達成した楽しさ、成功した楽しさ等を感じられるように配慮した指導を行います。この年代はスポーツに取り組む最初の習慣が作られる時期であり、「コーチが勝たせてくれる」「コーチの指示通りにプレーすればいい」といった思考とならないように注意してください。

